

本作では青色で表示されている部分を PL が読み上げを行う。
他の色で表示されている部分は GM が読み上げる。

CHAPTER: 1

「祭りの夜の落とし物」

うだるような湿気。

聞こえるのは遠くからの祭囃子と、それに負けじと響く蟬の声。

着物の隙間にたゆたう湿気の温もりを感じながら、コートは壁に体重を預けていた。

てくてく。

足音が聞こえる。

夕焼けと朱色に染まる道を背景として、待っていた彼女が現れた。



「ごっめーん！遅れちゃった！！！」

フード

彼女の名前はフード。

学校でもいつも目元を隠していて、まるでフードを被っているみたいだったから、みんなにいつの間にかそう呼ばれるようになった。



「はやくしないとアンバーおねえさんにいじめられちゃうよ～！」

コート

私の名前はコート。

オシャレのつもりでお母さんのコートを学校に着ていったのがきっかけでそう呼ばれるようになったよ。

ぶかぶかのコートは学校で皆に笑われたけど……。

あだ名の響きがなんだかフードに似ているから、とても気に入っているんだ。



「絶対、ぜえ～ったい、もうお酒呑んでるもんね！あの人！」

フード



「なんたって今日はお祭りの日だし！」

フード

そう。今日は夏休み最終週の日曜日。

近くの神社で大きなお祭りのある日である。

しかも私たちは小学六年生。

――つまり、今日は小学校最後のお祭りなのである！





「今日はゲソじゃないほうのイカ焼きを^か買うぞーっ！」



「あー！じゃあ^{わたし}私はトルネードのほうのポテト^か買う！！」

はしゃいでいるのが自分^{じぶん}だけではないことに、コートは^{すこ}少しうれしくなった。
いつもより^{おお}大きく^{うで}腕を^ふ振りながら、お祭りの^{まつ}会場の^{かいじょう}神社へと^{じんじゃ}歩を進める。
自分^{じぶん}たちの影は^{かげ}次々^{つぎつぎ}現れる^{あらわ}街灯と夕焼け^{がいう}に^{ゆうや}照らされながら、^て伸びたり、^の縮んだり、^{ちぢ}重^{かさ}なったりした。



「おーーーそーーーいーーー！」

神社^{じんじゃ}に^つ付くと、^{ひろ}広げた^{うえ}ブルーシートの上で^{こくう}虚空に^{さけ}叫ぶ^{おとな}大人の^{すがた}姿^{さけ}があった。
明らかに^よ酔っばらっており、^{すこ}少し^{はな}離れた^{さけ}ここからでも^{にお}お酒の^き匂いがする^き気がした。



「わーお。^{すて}既に”ターンエンド”^{かん}って感じだね」



「どうしてあの人は^いいつも^{こう}こんな^だだろう……」

アンバーお姉^{ねえ}さんは^{きんじょ}近所に^す住んでいる^{ねえ}やべー^{ねえ}タイプのお姉^{ねえ}さんだ。
なぜか^{わたし}私^きたちの^{から}ことを^か気に^かかけてよく^か絡んでくれる。
^{ふだん}普段から^そ染めた^{きんぱつ}金髪に^あ合わせた^{きいろ}黄色い^なカラー^のコンタクトをつけており
^{しょくば}職場では^{じぶん}自分の^{こはく}ことを、^い琥珀を^み意味する^なアンバーと^の名^の乗^のっている^のそう^のだ。
^{ほんみょう}本名は^{おし}教えて^{ねえ}もらった^よことがない^よので、アンバーお姉^{ねえ}ちゃんと呼^よんで……呼^よば^よされている。
^{おや}親からは^{あそ}あまり^い遊ぶ^{あき}なと^{ふしんしや}言^ふわれている^ふが、^{あき}明らかに^ふ不審^ふ者^{しや}である^ふから^ふであらう。



「すんすん……。あ！^{ふたり}二人の^{にお}匂いがする！^{かくほかくほかくほかくほ}確保確保確保確保！」

ぐりん。^{またた}瞬^{あいだ}きの^{しせい}間に^{しせい}クラウチングスタートの^{しせい}姿勢^{しせい}になっている^{しせい}アンバー。
^は張り^つ詰めた^{ゆみ}弓^{すがた}のような^や姿^{かのじょ}から、^{はっしや}矢^{はっしや}のように^{はっしや}彼女^{はっしや}が発射^{はっしや}される！



「ちょっと～どうして^{こゑ}声^みをかけないで^み見^みているのよ」

アンバーは^{ふたり}二人の^{まえ}前で^{きゅう}急^{きゅう}ブレーキ！
じゃっ！^{じゃり}砂利^{おと}の音。
そのままアンバーは^{ふたり}二人の^{あたま}頭^なを^なぐりぐりと^な撫^なで^なまわす。



「^{いた}痛い^{いた}痛い！^{つよ}スキンシップの^{つよ}強^{つよ}さ^{つよ}じゃないって！」





「うへへ、遅刻^{ちこく}の罰^{ばつ}じゃ罰^{ばつ}じゃ」



「はいっ！遅刻^{ちこく}したのはフードが遅^{おく}れたからです！」



「ほう？真犯人^{しんはんにん}はこいつかのう」



「みんな、これまで応援^{おうえん}ありがとう」



「諦^{あきら}めが早い^{はや}なあ」

……。どかーん！

花火^{はなび}の音^{おと}。音^{おと}の振動^{しんどう}が体^{からだ}の芯^{しん}を揺^ゆらした。

音^{おと}に背中^{せなか}を押^おされるように、屋台^{やたい}のおじちゃん^{うご}たちが動^だき出す。



「祭^{まつ}りの始^{はじ}まりだ〜〜〜〜！！！！！」



「まだ始^{はじ}まってないのにアホ^よほど酔^よっていたんだ」



「始^{はじ}まってないのにアホ^よほど酔^よってま〜〜す！！！！！」

の呑むぜ呑むぜ。

そう言^いいながらアンバーは来^きたブルーシート^{かえ}のほうへと帰^{かえ}っていった。

……。コートの手元^{てもと}に1枚^{まい}の紙^{かみ}を残^{のこ}して。

最後の夏祭^{さいご なつまつ}りにおねえさんからのプレゼント！

この神社^{じんじや}のどこか^{かく}に隠^{かく}しておいたよ ほんとだよ

フードと二人^{ふたり}で探^{さが}してみてね(かわいいネコちゃん.png)

--アンバーおねえさんより



「あ、今日^{きょう}は宝^{たから}探^{さが}しのイタズラだ！」

アンバーお姉ちゃんのイタズラ好きは今に始まったことじゃない。
いつも会うたび、私たち二人にプレゼントを変な形で渡してくれるのだ。
中身はまともなんだけど、渡し方がいつも突飛でおかしくて無茶苦茶で……。
でも、私はそんなアンバーおねえちゃんがとっても、とってもとっても好きだった。



「じゃあお祭りを楽しみついでに探しちゃおうか！」



「そうだね！ソッコーで見つけてビビらせてやるんだ！」

大切な友達が、人混みに流されてしまわぬように。
フードはコートの手をつなぎ、ゆっくり歩きだした。
手のひらから伝わる小さな温もりを感じながら、コートも歩を進めた。

